

アルケイアー記録・情報・歴史―

第一〇号 二〇一六年三月 一―六頁

南山アーカイブズ

特集Ⅰ「ヒルシユマイヤープロジェクト完結記念研究会」

緒言―初めに史料があつた

奥田太郎

南山大学社会倫理研究所

Foreword : In the Beginning was the Historical Sources

Nanzan University Institute for Social Ethics

OKUDA Taro

Archeia: Documents, Information and History
No.10 March, 2016 pp.1-6
Nanzan Archives

緒言―初めに史料があつた

奥田 太郎

二〇一〇年から足掛け五年にわたって進められてきた「ヒルシュマイヤープロジェクト」が、二冊のヒルシュマイヤー著作集の刊行（『工業化と企業家精神』日本経済評論社、二〇一四年三月一八日、『南山学園史料集10 ヒルシュマイヤー著作集 教育論』二〇一五年三月一六日）、その刊行記念シンポジウム「工業化と企業家精神―ヨハネス・ヒルシュマイヤーの時代―」の開催（二〇一四年六月二一日）、シンポジウム講演録の刊行（二〇一五年三月三二日）をもって無事完結することとなった。その完結を記念して、二〇一五年五月六日、南山大学名古屋キャンパスR棟三階R32教室にて、編纂委員の数名を報告者とする研究会が、南山大学社会倫理研究所および南山アーカイブズの共催で実施された。ヒルシュマイヤープロジェクトの企画・運営・実施を通じて見えてきたことについて、著作集『経済経営編（『工業化と企業家精神』）の編者である岡部桂史氏、著作集教育論編（『南山学園史料集10 ヒルシュマイヤー著作集 教育論』）の編者である林雅代氏、そして、プロジェクト全体を支えた南山大学史料室（現南山アーカイブズ）の永井英治氏にそれぞれ報告していただき、その後、ヒルシュマイヤー編纂委員会委員長を務めた川崎勝氏より、三報告全体を受けてのコメントを得て、パネルディスカッションおよび全体討論を行った。

当日の三名の報告者および川崎氏のコメントを受けた全体討論では話題は多岐にわたり、ヒルシュマイヤー自身のことから、南山大学のアーカイブズのある方の問題、さらには、歴史研究それ自体の問題、史料を扱うことを可能にする大学という機関のあり方の問題などに及んだ。三名の報告者による報告と川崎氏のコメントは、それぞれ論文として本号に収録されているので、そちらをご覧いただきたい。ここでは、全体討論でのいくつかの論点を簡単に紹介しておこう。

(1) 米国における日本研究の中でのヒルシュマイヤーの位置づけについて質問があり、岡部氏は次のように応えた。ヒルシュマイヤーが米国の日本研究の中でどのような位置づけになっているのかという論点そのものが、なぜかこれまで日本の経営史研究では注目されてこなかった。しかし実は、ヒルシュマイヤーは、海外では日本の経営経営に関する著名な研究者として位置づけられている。このことを忘れないでほしいというのが、刊行記念シンポジウム後に由井常彦氏より岡部氏に寄せられたメッセージであった。

(2) ヒルシュマイヤーにとって、米国の新古典派経済学とカトリック的な思想との葛藤はあったのか、という質問もあった。これについて岡部氏は、ヒルシュマイヤーがパツへに宛てた書簡を分析しなければ確かなことは言えないとしながらも、岡部氏自身の仮説として、ヒルシュマイヤーが経済学に対して心理的に距離をとっていた（そもそも彼にとって経済学はやりたい学問ではなかった）ことが、彼の経済学の仕事の中にカトリック的な気配を感じさせない（カトリック神父としては経済学に向き合わない）という状態をもたらしたのではないかと述べた。

(3) ヒルシュマイヤーが示した、研究における大局観の重要性について、実証の重視という歴史研究の最近の傾向との溝をどのように乗り越えていけるか、という研究方法論に関わる質問も出された。永井氏は、史料論ある

いは研究史のアプローチで自分の立ち位置を確認することでかろうじて大局的な見地に立てるのではないかと、と述べ、林氏は、ヒルシユマイヤーのアプローチは彼独自のものというより米国的なものだという印象がある、と述べた。岡部氏は、専門書などで図表を直接掲載せずに言葉で表現していくアプローチは確かに欧米でよく見られるものだと述べた。さらに、個別実証による専門分化が進み、学会などでも報告内容が細くなりすぎていて議論ができない状態にあるなか、今回のヒルシユマイヤー著作集に見られる大局的アプローチのインパクトは若手研究者には大きかっただろうと評価した。岡部氏に続いて、ヒルシユマイヤーゼミの出身者（南山大学卒業生）からもこれに関する発言があり、ヒルシユマイヤー自身は自分を歴史研究者ではなく経済学者だと考えており、すでにある歴史研究の業績を用いて日本の経営発展の要因を大局的につかみとることがヒルシユマイヤーの仕事であり、彼は概念化の重要性をよく説いていた、とのことであった。

プロジェクトの発足から著作集の刊行、記念シンポジウム、今回の研究会といった一連の流れのなかで鮮やかに浮かび上がってきたもの、それは、そもそもヒルシユマイヤープロジェクトを成立させたのが、当時の大学史料室に保管されていた貴重な史料群（「ヒルシユマイヤー文書」）の存在であり、それらを整理し閲覧可能な形にして公開する大学史料室という部局が大学内に存在したことであった、という事実である。そしてまた、ヒルシユマイヤーに光を当てることを促した直接の契機の一つが、著作集編纂委員の一人であった広瀬徹氏（当時、南山大学大学院ビジネス研究科教授）による本誌掲載の論考「ヒルシユマイヤーの業績―多領域活動への視点―」（『アルケイア』第三号、二〇〇九年三月）にあったことも象徴的な事実である。大学史料室あるいは南山アーカイブズがその学術研究の座としての紀要をもつことの意義が、ヒルシユマイヤープロジェクトにおいて鮮やかに示されていると言え

よう。

ある史料がもつ価値は、その史料が残される段階では誰にも測ることはできない。ヒルシュマイヤーの数々の遺稿や遺品もまた、急逝した一九八三年の時点では、誰もその価値を認識し得なかったであろうし、ましてや、三十年の時を経てこのような仕方で活用され命を蘇らせるとは誰も想像できなかったであろう。人の記憶とは当てにならないものである。実際ヒルシュマイヤーは、大学の中でも経済経営史学界の中でも「忘れられた」存在であった。しかし、史料は、そうした存在がかつて有した輝きを現在の私たちに対して鮮明に再現する潜在力をもつ。そもそも私たちの知的な営みは、そうしたものに支えられている。大学という学術共同体に属する私たちは、この種の知的誠実さを失ってはならないだろう。

ヒルシュマイヤープロジェクトが成し遂げたのは、史料に基づいた大学内の学術的遺産の発掘と再生という南山大学史上初めての試みであった。大学を取り巻く事情が厳しいと喧伝される昨今だからこそ、今一度、建学の理念を明確にもつ私立大学たる南山大学は、自らの学術・教育にわたる足跡を大切にすることで、次の一步を確かなものにするべきであろう。ヒルシュマイヤープロジェクトは、その種の作業のモデルケースになりうるはずである。そうした思いを込めて、ヒルシュマイヤープロジェクト完結記念研究会の内容をこのような形で活字として記録に残すこととなった。

「初めに史料があった。」これが学術の世界においては最初の一文であろうし、ヒルシュマイヤープロジェクトにおいてもまさにそうであった。